

# 子どもと共感しあい

## 保育をとらえなおす

宮 島 通 江  
近 藤 幹 生

### はじめに

保育者や父母が、ひとりひとりの子どもたちと人間らしい関係を築いていくことが、乳幼児保育の原点だといえる。お互いの心を通い合わせること、人間対人間の豊かな感情の交流をすすめることが保育の営みであり、そこに保育者としての生きがいを見いだすことができる。子どもたちと共感しあえる保育者でありたいといつもねがっている。（子どもから学ぶ保育者ともいえる）この姿勢から毎日の保育をとらえなおすことが大切であると考え、テーマを設定した。ここでは、保育者が子どもたちと共感しあう姿勢で保育にのぞみ、子どものことば（口頭詩）、表情、しぐさなどをとらえる豊かなアンテナをもつことの重要性を保育実践を通して考察していく。

### 1. 子どものことば、表情をつかむこと

#### (1) ことばを記録する動機

二歳児クラスでの場面。午睡が終わるころ、とも子が「こんどうせんせい、はな」という。担任は、背をむけたまま父母への連絡帳を書きながら「ともこさん、ひとりではなかみなさい」と応える。ところが、とも子はしだいに怒りだし、泣き声に変わる。「そんなに甘えて赤ちゃんみたいだね」といいながら、とも子の方をようやくふりむくと、とも子はきくの花を持っていた。この出来事は、保育者としてあってはならない姿勢を子どもによって鋭く指摘されたことであった。子どもの気持ち、訴えを、まず受けとめてあげることの大切さを教えられ、それ以来、子どものことばを記録しは

じめた。子どもたちの側から保育をとらえなおすことは、出発点であると同時に、継続して持ち続けるべき保育者の姿勢と考えたい。次は、五歳児クラスでの会話である。

(先生もお父さんになることになったよ)

ねえ、いつうまれるの？

おとこのこ、おんなのこ？

じゃあせんせい、ほいくえんやめるの？

だって、おとうさんになるとおしごといくんでしょ

だからやめるんでしょ

びょういんにつとめてもいいんだよ

(先生はやめないよ、保育園でみんなとあそぶのが仕事だから)

いっさらこのごろ、あそんでくれんじゃん やきゅうもしてくれんし

(いっさら…すこしもの意味)

ひろみ(六歳二ヶ月) さとし(六歳二ヶ月) しげゆき(五歳八ヶ月)

行事などにおわれていて、子どもたちと野球、鬼ごっこなど体ごとぶつかるあそびを一緒にしていなかった保育を反省させられた。ことばを記録する動機は、保育者によって異なってよいが、その時の想いは新鮮であり、書きのこしておきたい。

## (2)父母の仕事、生活を背負う子どもたち

子どもたちは、毎日、家庭での出来事や途中で出会った経験などを運んでくる。それをまず、受けとめてあげたい。子どものことばを記録することから、父母の仕事、家庭や地域での生活を把握することができる。以下の例はいずれも農家の子どもたちのことばである。

もう(牛のこと)のうんこ、つめてつめてはこぶからねえ(砂場でコップに砂を入れてあそんでいる。畑に牛の堆肥をまく頃)

なつき(二歳十ヶ月)

おとうここ、おとうここ、ゴオーって、おやまゴオーって(トラックのおもちゃを動かしながら、父親がやまで働いていることを思いうかべている。やま…畑のこと)

けいすけ(二歳三ヶ月)

二歳児も大人たちの仕事をよく見ており、あそびの中にそれが多く登場してくるこ

とがわかる。

今日、激しく社会が変化する中で、子どもたちからみて、父母の仕事が見えにくいこともたしかである。しかし、子どもたちは、父母の仕事、家庭や地域での生活を背負って生きている。ことばの記録を通して、子どもたちが育ちゆく背景を見つめていきたい。

### (3)育ち合う姿への感動

五歳児クラスで野球をとりくんだ時の激しいけんかを紹介する。

さとし：そっちのくみ つよいひとっぱいいる

つよし：せんせい さとしくんはね おれたちのしゅうじくんにかるくうっていうんだよ

さとし：そっちのくみ おとこのこが七人もいる

つよし：かずはおなじじゃなか ぜんぶの

さとし：おなじでも つよさがちがうよ

つよし：つよさがちがってもかずはおなじだよ

野球も終えて、給食がはじまろうとしているのに、二人の口論はおさまらなかった。実は、このけんかの中で、二人は相手を批判する力を身につけているといえる。

三歳未満児での仲間関係を考えてみる。

たつのすけ（一歳二ヶ月）は、二歳児たちが砂場で作ったケーキをこわしたり、ごっこあそびでの積木のお弁当を取ってしまっていて返そうとしない。集団の中でつねにトラブルをひきおこす存在といってよい。しかし、二歳児たちは彼を受け入れていく。「たっちゃん、すなくってるよ」と教えにきてくれたり、おやつですわる場所へ手を引いてつれていくこともある。つまり、けんかやトラブルを経験しながら、仲間意識が芽生えていく。

ことばや子どもたちの姿を記録することから、仲間のかかわりを具体的に把握し、ひとりひとりの課題を明らかにすることができる。けんかも危険でない限り、具体的につかみたい。

### (4)子どもたち自身の発見

あそびや活動の高まりの中で、全身で表現する子どもの姿はすばらしい。表現のう

ち、ことばについてのみ紹介する。散歩へでかけたとき、二歳児の発見である。

あっ ふるとったあだ なつき（二歳十ヶ月）

ぼっしゃっしゃもきたよ けいすけ（二歳四ヶ月）

「ふるとったあ」はヘリコプター、「ぼっしゃっしゃ」は消防車のことである。ことばが多く出はじめる時期であり、必ずしも正しい日本語とはいえない。しかし、正しくよりも楽しく話すことの方を重視したい。保育者がよい聞き手であるとき、子どもは自分の発見や感動を力いっぱい表現するからである。

また、難問をぶつけて大人を困らせることがよくある。夕食時、三歳児と母親との会話である。

おさかな、どこからきたの？

（うみからよ）

にんじんどこからきたの？

（はたけからきたんだよ）

おはしは、どこからきたの？

（おやまから）

おちゃわん、どこからきたの？

（おじさんたちがつくったの）

コップ、どこからきたの？

たけみちゃん、どこからきたの？ たけみ（三歳四ヶ月）

当初、ていねいに応じていた母親も、彼女の質問せめに閉口し、おちゃわんのあたりから「もう、まったく、はやくたべなさい！」とこごとをはさむ。でも最後の問いには「おかあさんのおなかからきたの」とやさしく答えた。

子どもの驚き、感動、疑問を知るとき、ひとりの子の中に、その子にしかない宝とであったように思うことが多い。

#### (5)表情・しぐさをとらえる

ことばを記録するとりくみの原点は、子どもと共感しあう保育の姿勢にあると考えたい。まだ、ことばを十分に持たない、乳児、1歳児などにおいては、子どもの表情、しぐさなどを把握できるよう、心のアンテナをもつことが共感につながる。一歳児の

要求をつかむことは難しい面がある。たつのすけ（一歳二ヶ月）が、水道の所で砂場のバケツをもって、「アッアッ」といっている。水を出すことの要求であると考えて出してあげると、不満そうに「アッアッ」という。今度は止めることを要求しているのだととらえ、止めると泣いておこる。何度か繰り返し相手をしているうちに、たつのすけの水量を多くしてほしいねがい気づき、大きく蛇口を開くと嬉々としてあそびはじめた。ようこ（一歳四ヶ月）は、ことばの少ない子だが、毎朝、保育者の目を見つめる。「おはよう、ようこちゃん」と言ってあげて保育者もようこの目を見る。彼女は、保育者の視線が自分にむけられていることを確かめながら、園庭へ歩いていき、空を指さした。そこには月がのこっていた。

ことばが充分に出ない一歳児たちと共感しあえるとき、目と目で心の通い合いが可能となっている。

0歳児も、豊かなサインを送ってくる。畳の上でねているこうじ（七ヶ月）の近くを歩いて通ると手足を動かしながら笑っている。そのまま通りすぎると、泣きはじめた。「あっ、だきあげたり、あやしたりしてほしいんだな」と彼のねがいがわかる。乳児の場合は、身体的、生理的な状況を詳細に知ることが不可欠だが、保育者との豊かな感情の交流がもとめられる。

以上(1)から(6)まで、子どものことば、表情をつかむこと、すなわち子どもと共感できる保育の姿勢について述べてきた。

## II、子どもをみるふたつの目

子どもたちをとらえるために、二つの角度から考えていくことが大事である。

まず、目の前の子どもをよく見ること。Iでのべた共感する姿勢を土台にして、子どもの心によりそって観察することである。子どものもつすばらしさばかりでなく、保育での悩みについても具体的に把握していく。

第二は、職員会議や研究会などでの学習や話し合いを通して、ひとりひとりの子どもへの見方を広め、深めていくことである。この二つの目（複眼）をもって保育をすすめるとき、子どもたちを豊かにとらえ直すことができる。子どもに学ぶ。謙虚な姿

勢を失わないかぎり、どの子にもすばらしい宝があることに気づいていくと思う。

### Ⅲ、保育実践の中で記録を

I でみてきたように、子どもたちは毎日、生き生きと成長している。この点を実感できる保育という仕事は、人間的でありすばらしい。記録の方法やとりくみの例について紹介したい。

#### (1) 採集の方法

- ① 記録をいわずに、子どものことばを正しく書きとめること。（ことば、表情、なまえ、年齢、採集者）
- ② 採集者の姿勢については、心のアンテナを広く深くはって、聞きじょうずであること。（詳しくはⅠの内容を参照して下さい。）
- ③ Ⅱでのべたが、保育者の集団の中で、考え合い、感動しあいながら子どもをよくみていくこと。
- ④ 保育者自身が、自然や人間の心を感じとれる、詩が口ずさみたくなるような生活でありたい。文学や芸術の喜びを味える大人として努力していくこと。

#### (2) 記録のまとめ

- ① 成長の記録としてアルバムや文集に生かせる。
- ② 絵本やお話づくりにとりくむ。
- ③ 子どもの側からみた具体的な実践記録としてまとめる。

### おわりに

子どものことばには、それを聞く、記録する人によって様々な感じ方、意味がある。ひとりひとり子どもたちがちがうように、保育者の個性もちがうので、子どもとの共感の内容も異なって当然である。その人らしい子どものとらえ方を深め、お互いに交流していこう。保育において聞くこと、記録することは、子どもと共感していく要になっていることであると思う。地味なつま重ねの中で、共感の内容も高まり、保育のとらえなおしをすすめていきたい。

**【参考文献】**

『ことばの中の子どもたち』（今井和子著 童心社）

『現代と保育』No.15（ひとなる書房）

『ぼこんとうのころ知っとうけえ』（さくらんぼ保育園・川内松男著）

『子どもとことば』（子どもとことば研究会）

『挑まぬものに発達なし』（近藤薫樹、幹生著 労働旬報社）

（松本市内田保育園・川上村みやま共同保育所）